

視察用

様式(細則 5-2)

平成 31 年 4 月 2 日

浜田市議会議長
川 神 裕 司 様

議員名 西田 清久



調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 3 1 年 3 月 1 8 日 (月) ～平成 3 1 年 3 月 2 0 日 (水)
2. 視察先および研修テーマ
 - (1) 場所 宮崎県日南市 油津商店街 “Yotten”
内容 空き店舗対策事業について
 - (2) 場所 宮崎県日南市 飫肥町
内容 飫肥食べ歩き・町あるき事業について
 - (3) 場所 熊本県球磨郡あさぎり町
食・農・人総合研究所「リュウキンカの郷」
内容 古民家をリノベーションした宿泊型の研修所「リュウキンカの郷」において「食」を軸とした「人づくり・まちづくり・生業づくり」の体験塾研修



3. 参加者 川上幾雄、 上野 茂、 笹田 卓、 道下文男、 西田清久

4. 調査経費 39, 277円

5. 調査研究活動の概要

(1) 宮崎県日南市 油津商店街「空き店舗対策事業」について

事業説明；日南市産業経済部商工・マーケティング課商工係 阪元稔史氏

現地案内 日南市産業経済部商工・マーケティング課商工係 汐口竜平氏

日南市議会事務局

主任主事 中山綾香氏

・宮崎県日南市は、宮崎県南部に位置し、東に日向灘、西に都城、北は宮崎市に隣接しており、人口約 52,000 人、面積約 536 km²で、規模的には浜田市に類似している。

・油津商店街”は、昭和 40 年代をピークに少子高齢化社会で人口減少が進み、市民の意識から「商店街」という存在が薄れ、シャッター通りと化した。

・平成 25 年に就任された崎田恭平市長（39）が、商店街再生に向けて民間人の登用（報酬年額 1000 万円超え）を実行した。

・333 人の中から選ばれたテナントミックスサポートマネージャーが木藤亮太氏である。

・木藤亮太氏のミッションは内需の循環。日南市内の消費循環の促進と、そのための魅力ある商店街の復活を目指す。

目標達成指標

- 空き店舗活用の検討、業種バランスなどの配置計画の策定及び事業者の誘致、並びに適正な配置

（目標：4カ年で20店舗誘致）

- タウンマネジメント体制の整備
- 賑わい創出に係るソフト事業等のサポート及び協同体制の構築
- その他中心市街地活性化に資する新規事業の提案及び実施
- 商店街等の既存店舗の経営改革等に係るリニューアル指導・支援及び商店主、地権者との信頼関係の構築

・木藤亮太氏の取組1年目

- 現状把握&信頼関係づくり（毎週朝、毎月全体でミーティング）
（商店街とのコミュニケーション）、（応援団キトチケットの結成）
（株）油津応援団の設立

木藤氏を中心に一人30万円×45名以上の出資で、資本金1800万円のまちづくり会社（株）油津応援団を民間で設立した。

- 他にはない公民連携を目指し、市内・市外からまちの応援団をつくることにより、連鎖の輪を広げた。しかし1年目の店舗誘致は、0件

・木藤亮太氏の取組2年目

- 2年目に入ると、商店街の空気が動き始め、「ABURATSUCOFFEE」や二代目湯浅豆腐店がオープンした。また若者が関わる土曜夜市や大学や高校との連携が活発になり、地元の人が商店街を語り始めるようになる。

- 市民の声は、“誘致店舗は2件だけど、20店舗はやっぱり無理！”

・木藤亮太氏の取組3年目

- まちが変わり店舗誘致が進む

- * 商売を続けてきた店主らの気持ちの変化
- * 新たな来街目的が生まれた
- * IT関連企業の進出

- 二人の大学生が商店街についての卒論を商店街で発表した。

“外の人が一生懸命なのに商店街の人たちは何をやっていたのか！”

大学生からの厳しい指摘に『商店街の人々に火が着いた』

・崎田市長は、テナントミックスサポートマネージャー木藤亮太氏の他に

- マーケティング専門官「田鹿倫基」氏、ミッションは外貨の獲得（市外からの「外貨」を獲得し、市内雇用の拡大を目指す）

- まちなみ再生コーディネーター「徳永煌季」氏（飢肥地区の空き家活用とまちなみ再生を目指す）

2人の民間人を登用した。（市長の一本釣りらしい）

・マーケティング専門官「田鹿倫基」氏の取組

日南市のマーケティング戦略

1、2年目（H25、26）日南市のイメージ戦略の実行

- 企業とコラボしやすい日南市「日本一組みやすい自治体」への挑戦
- 日南市とコラボすることが「かっこいい」。

2、3年目（H26、27）日南市と企業のコラボを通してWIN-WINの関係を築く。

- インキュベーション施設、コワーキングスペースなどを活用した事業誘致。

3、4年目（H27、28）企業とのいい関係を仕組み化する

- 企業合宿や起業家の育成が日南発のビジネスやサテライトオフィスの

設立に繋がり雇用の創出！

マーケティング専門官は、行政の予算（＝税金）を使うのではなく、クラウドファンディングを使って世界中から資金を集めた。また日南市の飫肥杉を使った小物を世界最大級のギフトショーに出展した。

そして企業とのコラボレーションを推進し、20万円ワーカー育成プロジェクトなど市内の眠る労働力を掘り起し、収入を向上させることで地元に住み続けられるまちづくり環境を整備した。

- ・若者がチャレンジするまち、組みやすい自治体というブランディングが東京からIT企業を呼び込んだ。（活用が難しいとされていたブティック跡をリノベートして南九州一美しいオフィスが誕生した。
- ・4年目では、行政が事業の信頼性を担保してあげ、持続していく仕組み、体制を整えたことで、市民のやりたいことが商店街で出来るようになった。
4年目の新規店舗誘致目標20店舗が、実績では29店舗となった。

所感

安倍首相が、ある会議で“油津商店街に行けば、やりたいことが実現する。そういう何かわくわくするような空気感が、今、商店街再生の大きな原動力になっている。こうしたわくわく感こそが、地方創生の鍵であると考えている“と発せられたように商店街は活きており、関わる人たちの意識の持ち方や前向きなエネルギー、そして核になって全体をコーディネート出来る人材の存在が必要不可欠だ。

日南市の崎田市長は、“日本の良い前例を、日南から創っていく”と言われるように、市長より高い報酬を用意してでも「ミッション」をしっかりと実行出来る民間人を登用し、持続可能な油津商店街にシフトするために、多様な機能を商店街に誘致し、いたるところに多様な人材のコミュニティーを誕生させた。

まちづくりの基本は、人材であることは言うまでもないが、一人一人の意識やエネルギーがどこにあって、どこを向いて、何をどうしたいのか。人間の気持ちの連鎖は目に見えない商店街の空気を変え、環境を変えていった。

(2) 宮崎県日南市飫肥町 飫肥たべあるき・町あるき事業について

事業説明及び現地案内；(一財) 飫肥城下町保存会事務局長

後藤廣史氏

事業概要（事業開始の経緯、特徴等）について

- ・宮崎は、昭和 30 年代半ばから昭和 40 年代にかけて、新婚旅行のメッカといわれていた。
- ・昭和 50 年代、次の 3 つの事業を、時期を同じくして、行政と市民がいったいとなって推進したことに、城下町飫肥の特徴がある。
 - ① 飫肥城復元事業
 - ② 重要伝統的建造物群保存地区の選定（昭和 52 年選定）
 - ③ 本町通り（国道 222 号線）の拡幅計画
- ・平成 20 年頃までは、飫肥城内の観光が中心で、本町通り商店街まで足を運ぶ観光客はほとんどいなかった。また観光の業態も低価格で、何ヶ所も巡る「駆け足観光」が主流で、飫肥に留まる時間は 1 時間未満が多かった。
- ・このような傾向が続き、そして空き家と少子高齢化が進行する飫肥の町は、急速に衰退してしまい、新たな魅力あるまちづくりが喫緊の課題となっていた。
- ・飫肥城下町保存会が管理する 7 由緒施設のうち、3 施設は本町通り（及びその周辺）にあることから、その入館増を図ることが大きな課題であった。
- ・そこで「あゆみちゃんマップ」の登場となる。（平成 21 年 4 月 29 日）
 飫肥を訪れる観光客を、城下町の風情を楽しみながらまた由緒施設を見学しながら、飫肥城内から城下の本町通り（国道 222 号線）まで誘導し、地元の昔ながらの美味しい食べ物や手づくりの商品等と引換えるもので、時間をかけて、ゆっくりと楽しんでもらえる仕組みづくり（＝あゆみちゃんマップ）を考え出した。

現在の取り組み状況と効果について

- ・マップ販売枚数は、平成 21 年 4 月 29 日からスタートして年間 3 万枚前後を販売、（平成 30 年 7 月 13 日）25 万人達成記念イベント開催。
- ・マップの内容は、小村記念館や飫肥城内にある歴史資料館など、由緒施設 7 カ所への共通入館券付き（1,200 円）と、本町商人通り近辺にある由緒施設 3 カ所への入館券付き（700 円）の 2 種類がある。
 マップ登録店舗数は、当初スタート時 16 店舗➡44 店舗
 マップの販売価格は、当初 1000 円➡（H26、4）1100 円➡（H29、4）1200 円

飫肥城下町保存会と市の関係について

- ・昭和 51 年 7 月 財団法人飫肥城下町保存会設立
 日南市より管理運営を受託
- ・平成 18 年 4 月～平成 23 年 3 月（5 年間）
 第 1 期指定管理を受託
- ・平成 23 年 4 月～平成 28 年 3 月（5 年間）

第2期指定管理を受託

- ・平成25年4月 財団法人より一般財団法人となる
- ・平成28年4月～平成31年3月（3年間）

第3期指定管理を受託(平成30年度指定管理料58,000千円)

現状と今後の課題について

- ・入館者増の取り組み
 - ①新規事業の取組み（飢肥城ならではの自主事業）
 - ②インバウンド（クルーズ船、定期航空）移住定住など市の施策との連携
 - ③2020年7月～東京五輪・パラリンピック開催
同年10月～国民文化祭・全国障がい者芸術・文化祭の宮崎県開催
- ・新たな収益事業の構築
 - ①観光駐車場の有料化
 - ②城内（大手門内）有料化
- ・飢肥の町づくりを担う
 - ①「あゆみちゃんマップ」による飢肥のまちの回遊性の推進と商店街の活性化
 - ②飢肥の歴史的資産を活かしたまちづくり
 - ③まちなみ再生コーディネーター（平成27年8月～1名）
 - ④地域おこし協力隊（平成29年4月～1名、平成30年4月～1名）
 - ⑤空き家の活用（古民家の再生）

飢肥観光における城下町保存会の功績

- ・最大の功績は、自主事業として始めた「食べあるき町あるき」により、飢肥観光の課題であった飢肥城下へ観光客を回遊させることに成功したこと。
- ・これにより店舗数も増え、地域に多大な経済効果をもたらすようになった。
- ・一方、限られた滞在時間の中で有料施設に入館する観光客が少なくなるという弊害も出ている。この傾向は、飢肥そのものが有料施設に入館しなくても、飢肥城内、武家屋敷通りなどの魅力で溢れていることも入館者の減に拍車をかけている。

城下町保存会から市に提案

- ・保存と適切な活用、100年後も本物の飢肥の歴史遺産を！町並みを！
 - ①まずは歴史的建造物を優先的に修理・活用を
 - ②施設の特徴を活かした自主事業の取り組み
- ・新規料金の徴収と利用料金制度導入による弾力的な運用
 - ①観光駐車場有料化及び大手門入場料の徴収

- ②使用料（市入館料）から利用料金（指定管理者収入）へ
- ③会場使用料の規定整備と徴収

所感

伊東家と飫肥藩の残した城下町が見事に保存されていることが、第一印象である。重要伝統的建造物群保存地区の選定により電線の地中化もあり、城下町の落ち着いた佇まいの中に、現代的に手を掛けた古民家のリノベートなど専門家の知恵と工夫が至るところで見られた。

指定管理者の城下町保存会と市との関係もいろいろなキャッチボールがあるようで、数ある由緒施設の維持管理（次から次へと部分改修が必要となる）の費用の捻出にも出来るだけ自主財源を使わない知恵と工夫が見られた。

（３）熊本県球磨郡あさぎり町 「食・農・人総合研究所リュウキンカの郷」

～空き家をリノベーションし、広域連携の法人化で自立に向けて稼ぐ、地域コミュニティビジネスの取組について～

講師； 本田 節氏 郷土の家庭料理 「ひまわり亭」 代表

食・農・人総合研究所「リュウキンカの郷」代表

九州ツーリズム・コンソーシアム「ムラたび九州」代表

助手； 村口圭子氏 元 人吉市役所健康福祉部長

・本田節さんの想いと取組み

若い時の闘病生活の経験から、「食」や「生き方」についてゼロから考え直し、1989年に郷土料理の研究や高齢者にお弁当の宅配ボランティアを行う「ひまわりグループ」を結成し、1998年にそのグループのメンバーとともに、地域の主婦たちによる地産地消の農村レストラン「ひまわり亭」を立ち上げた。

地域の財産ともいえる「おばあちゃんの知恵・経験・技・感性」を活かさないのはもったいない、地域の素晴らしい食材を活かさないのはもったいない、取り壊し寸前の築120年の古民家がもったいない。「もったいない」をキーワードとし、古民家を移築したお店を拠点に地域の素材を出来る限り活用し、安心安全な食を提供している。

そこからさらに変化の延長として、2017年球磨郡あさぎり町に「食・農・人総合研究所リュウキンカの郷」を開所した。

・リュウキンカの郷が目指すこと

「食」を軸とした“人づくり・まちづくり・生業づくり”の実践。

様々な観点から「食」を見つめなおし、地域の資源・人・自然・文化・先達からの知恵を複合的に繋ぎ、新しい農村コミュニティの在り方を創造する。

・5つの取組み

①オーダーメイド研修

少人数でじっくりと食・農・命について学びたい団体向けの研修プログラム。
研修内容は要望に沿って組み立てる。

②イベント・セミナー事業

食・農・命をテーマに、たくさんの人々が学びあい、そして交流の場を作るためのイベントセミナーを開催する。

③地域マネジメント事業

地域の中にある資源を再発見し、磨いて繋げ、地域全体が収益を上げられるようなコミュニティビジネスの創出に取り組む。

④命の食事プログラム

命の源である「食」について、様々な観点から学び合い、実践して意識を高め合うための研修プログラム。

⑤農村民泊事業

農泊での滞在による交流と学びをプロデュースする。
リュウキンカの郷での宿泊の他、地元農村民泊の紹介もする。

・私たちの今回の視察研修は、①のオーダーメイド研修であり、前段の交流会では、地産地消の食材を解説を交えて頂きながら長時間にわたりそれぞれの課題について意見交換をおこなった。

・後段は、リュウキンカの郷研修ルームにおいてプロジェクターと資料で研修
農村レストラン「ひまわり亭」

お料理が大好き、おしゃべり大好き、人の世話が大好きな50代から70代までの世代の違う地域の主婦たち20人が、“これまでのボランティア活動も楽しいけれど、生涯現役でもっと生きがいや居場所づくりや、地域の役に立ちたい！”という話からみんなで出資、借金（補助金ゼロ）して立上げ、現在21年間続いている人気レストラン。

食・農・人総合研究所「リュウキンカの郷」

人吉球磨グリーンツーリズム推進協議会

○ 地域内の女性が主役となって、地元産の農産物を使った郷土料理を農家民宿や農家レストランで提供するとともに、農家独自で開発した農産加工品を地域へ訪れる旅行者等へ販売。

○ 持続可能な地域の実現に向けて、若手人材の育成及び地域コーディネート等を目的に協議会の法人化を行うとともに、泊食分離等を踏まえた地域一体型

経営を目指す。

九州ツーリズム・コンソーシアム『ムラたび九州』の取組

- グリーンツーリズムを实践する九州各県のトップリーダーが、農山漁村を基盤としたコミュニティビジネスの創出と、地域活性化を担う人材を育成する組織として、H28年に「ムラたび九州」を設立。
- 九州全域の農泊に取り組む地域とのネットワークの構築とマーケティングに基づく地域経営体の強化を目指す。

・フットパスの实践

所感

人と出会うこと、人と話をするのがとても楽しみな人吉・球磨地域である。今回の視察研修（オーダーメイド研修）も、本田節氏の進化し続けるまちづくり、人吉・球磨地域の取組みや考え方などにどっぷり浸りたくて計画した。

古民家を移築した「ひまわり亭」から古民家をリノベートした「リュウキンカの郷」までの21年間の本田氏の苦勞を、人に対して苦勞と思わせない人柄が、地域の女性たちの気持ちを前向きにまとめられているのかと感じるが、実際に出会い体験をすると、遥かにそれらを超越している。